現身を御隠しになった大節についてお話し下さり、如何に国の掟が厳しかろうとも、この世をお創り下された親神様の思召に沿いきって、つとめをすることの大切さと、前年倒されたかんろだいの事情について、親神様からお互いの心の繋ぎが欠けている御知らせであり、一手一つになれとのお仕込みであることを心に治めて、地に足のついた歩みをご要望下さいました。そして、真柱様は、この年の6月に御身上となり、しばらく入院されましたが、リハビリにお励み下されて、現在は少しずつお元気になられていると聞かせて頂き、大変嬉しい限りと存じます。おふでさきに、

みへてからといてかゝるハせかいなみ　みへんさきからといてをくそや　（一―18）

と仰せ下さいます。親神様は、前もって、見えない先から、かんろだいの事情や真柱様の御身上を通じて、ちゃんと警鐘のお知らせを下さっていたのだなと反省いたしました。

さて、今年の年頭あいさつで真柱様は次のように　お話し下さいました。『コロナにせよ、台風にせよ、私はそこに、親神様の力の大きさを見せつけられたように思うのであります。私たちのつとめは、その親神様のお力を頂かないことには進めていくことができないのであります。そう考えたら、お互い、親神様に働いて頂けるように、しっかりと、そして素直に、教えを心に治めていかなければならないと思ったのであります。』とお聞かせ下さいました。しっかりと素直に教えを心に治める、と仰せ下さったのであります。

にち〳〵にすむしわかりしむねのうち　せゑぢんしたいみへてくるぞや　（六―15）

と仰せ頂くように、日々心を倒さずに、しっかり信心していくうちに、少しずつ心が澄み切って　成人をさせて頂き、親神様の御心すなわち思召を悟ることができる、との大意ではないでしょうか。では、親神様の御教えとは、具体的にどのような　教えがあるのでしょうか。例えば、基本教理ともいわれる、かしもの・かりものの理、十全の守護、又は八つのほこりなどがありますが、信仰の代が重なり、銘々の信心が深くなってきますと、ひのきしん、つくし・はこび、更には、いんねんの自覚やたんのう、といった悟りが、ごく自然に湧いてくるようになると思います。しかしながら、信仰初代ではなく、代を重ねて信仰させて頂くお互いは、今だからこそ、パンデミックと呼ばれる世界規模の大節をお見せ下さるお急き込みだからこそ、この機会に、親神様が何故人間を創造されたのかという目的と親の真の望みを、改めて得心しなければならない気がするのであります。お急き込み下さる思召にお応えする為にも、今一度、何故自分は信仰をしているのか、何の為に子や孫、あるいはおたすけによって導いた方々に、信仰のバトンを繋ぎ、広めていくのかという基本姿勢を見直せる猶予時間を頂いているように思うのです。

私は現在4人の子を持つ親なのですが、親になれたのは子どものお陰であり、その子どもをお与え頂けたのは、親神様の御守護と感じる時、私の中で子供は「授かりものから預かりもの」となり、仮に子育てが育成にあてはまるならば、親神様が子育てという育成にあたって、親である私たち夫婦に、何を一番伝えたいのか、と思案いたしますと、それは子育てを通じて、夫婦お互いの癖性分に気づき、因縁を自覚させたい、との親心ではないかと思ったのであります。申し上げたいことは、子育の根幹にある親神様の親心とは、私たちを本当の親として、又は、ホンマモンのおたすけ人として育てるための成人の道、或いは、親神様が人間創造の時より、長い年月に渡って、ご苦心下された子育ての道を、億分の一でも味わう時間を下さっているのではないでしょうか。こんな言葉はないかもしれませんが『子育ての中に親育てあり』？ではないのか、そのために夫婦に縁のある子どもを預けて下さり、親も子も共々に育ちなさい、と仰せられているように悟ったのであります。おふでさきに、

せんしよのいんねんよせてしうごふする　これハまつだいしかとをさまる　（一―74）

と仰せ下さいます。陽気ぐらしの土台は、夫婦のたすけ合いが必須ではないでしょうか。

ここで、教祖のひながたに見る子育てと人材育成を拝させて頂きたいと存じます。天保9年10月26日、教祖が、月日のやしろとなられてより、現身を御かくしになる迄の50年に渡る道中は、実にその25年以上が貧に落ち切られる道でありました。安政2年、教祖58歳の時、灯す油に事欠く夜にご家族で月明りを頼りとして糸つむぎの作業をなされておりました。作業もひと段落して、遅い晩御飯を食べようとなされた時、末娘のこかん様（数え19歳）が『お母さん、もうお米がありません。』と言うと、教祖は『世界には、枕元に食物を山ほど積んでも、食べるに食べられず、水も喉を越さんと苦しんでいる人もある。そのことを思えば、わしらは結構や、水を飲めば水の味がする。親神様が結構にお与え下されてある』と励まされたので、子達も、くず折れがちな心を振り越したとあります。

この一連のお話を、我がこととと思案した時、果たして同じことを子供たちに伝えきれ